
答えはまだ見えない

風雅 黒

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

答えはまだ見えない

【Nコード】

N6304M

【作者名】

風雅 黒

【あらすじ】

何も変わらない平凡な毎日、そんな日々を送っていた青年月城一輝はそんな毎日がずっと続くものだと思っていた。

とある日に一輝が家に帰ってみたものは血に染まった家具や部屋そして…

これはそんな彼の日々を描いたファンタジー系ドタバタ復讐劇である。

第1話

目が覚める。まだ眠いが無気力にぼーっとする時間を確保できるかどうかかかっている。仕方がないしぶしぶ眠い目をこすりながらも時計のほうへと目を向ける。

時計の針はまだ6時半をさしていた。これならまだしばらくはぼーっとしていられるな。

ベッドに寝転がり、天井を見上げる。

あー…このひと時が至福の時だとしぶしぶ思う。学校に行くのが本当にダルく感じるほどだ。

今日一日はこの気分を味わっておきたい。しかし、時間というものは無情でえ？もうこんなに過ぎてたの？ってくらい流れていくもので。

「一輝お兄ちゃん、朝だよおっ！グッモーニンッだよおっ！」

そういうや否や、勢いよく扉を開けて登場した騒がしい怪獣。もと今年中学三年に進級した妹が、俺の腹めがけてとび蹴りを仕掛けてきた。

制服姿でそんなことしたらスカートの中が丸見えだぞとか、中三になったんだからもっとつつしみを持てよ妹よとかそんなもんに気にしている暇はない。

その場からすぐに逃げようと回避に移ったわけだがベッドの上で寝転がっている上に回避運動が大分遅れた。ベッドってなんでこんなに動きづらいんだ。

まあ、そういうことだから逃げる事は敵わないわけで。

「ぐろつぷあつ?!」

俺は勢いよく蹴飛ばされた。腹がものすごく痛い。毎朝のことながらよくこんなことされて無事だなど思う。普通の人ならば骨とか内臓とか逝かれてるぞ。すがすがしい朝が生々しい朝になるぞ畜生。

「おはよーお兄ちゃん」

なんの悪びれもなく普通に挨拶をしてくる妹に殺意を感じた。俺、怒っていいよな? ねえ?

「毎回毎回……お前ってやつは……」

「何々? 鈴音はお礼なら別に要らないっていつも」

「俺に蹴りいれないと起こせないのかああつ!!」

「一輝お兄ちゃんが怒りの波動に覚醒したあああつ!!」

妹もとい鈴音を今日という今日は懲らしめてやらねば、フッフ……どんな目にあわせてくれようか。

そうだ。額に油性インクで殺と書くのはどうだろうか?

そんな不埒な考えを浮かばせながら階段を駆け下り、リビングへの扉に手を伸ばした。扉を開けたその先にいたのは般若とかした母親……いえ、お母様がおられました。

「何を朝からドタバタしているのかしら? ねえ一輝君教えてくれなにかしら?」

「あ…あはは…お、おはようございます」

いつものほほんとしたたれ目が釣り目になり顔に青筋を立て、フライパンを右手に持ったまま仁王立ちをしたその威風堂々とした姿には恐怖すら覚える。

そのお母様の後ろには舌を挑発してくる我が憎き宿敵鈴音。本当にいつかえらい目にあわせてやる。
だが今はそれよりもだ。

「おはようございます。さあ。教えてくれるわね？一輝君」

この目の前の般若もといお母様をどうにかしなくては……

「あー、いやその。俺の愛おしい妹との兄弟愛を育む為に少しばかり遊んでいましたです、はい」

「あらあらそうだったの。鈴音と一輝が仲がいいことはわかったけども今度からはもっとおとなしい遊びをなさいね」

お母様の釣り目が垂れ目に戻る。色白な顔が少し赤くなっていたのが気になるが…なんとか怒りを鎮められたようだ。我が家のヒエラルキーは頂点は母さんでそれに続き父さん、鈴音、そして俺である。普段父さんと母さんは新婚のようにイチヤイチャしているんだ母さんが怒りの臨界点を超えるとたちまちお母様が参上する。お母様が参上すると雰囲気は圧倒されてなのか父さんは顔を青ざめ、トラウマを遠ざけるかのようにゴメンナサイゴメンナサイとつぶやく。一体過去に何があったのだろうか…

鈴音がなぜ俺よりも上かという、立ち回りがうまくてつきいる隙がなかなか見つからないからだ。

それに比べて俺は立ち回りがうまくないし、馬鹿だし…自分で言っ

ておいてだんだん鬱になってきた。

これは今は置いておこう。立ち直れなくなりそうだ。今はそれよりもご飯だご飯。朝ご飯は一日の活力の元らしいし。

食卓テーブルへと向かうと俺以外の家族全員がそろっていた。

「お兄ちゃん遅いよー」

「わかってるわかってる」

今日はパンではなくご飯らしい。皿にはベーコンと目玉焼きそしてウインナーとサラダそして別の器に味噌汁がよそおってあった。

「それでは…」

「いただきます」

「」「」「いただきます」「」

ご飯を口に頬張った後、味噌汁を啜る。うむ、朝にパンもいいけどもご飯とみそ汁もいいな。

「今日の天気予報って聞いている？おとーさん？」

「いや、聞いてないな。TVつけてみようか」

天気か…そういや最近妙な天気が続いているもんなあ。雨だと思ったら雪になったり、晴れだと思ったら突然落雷が落ちてきたり、今日は晴れてるから問題ないだろと油断すると必ず痛い目にあう。経験者が言っただ。間違いない。

今日こそは痛い目を見ないためにもニュースを見ておかねば…

《——突然ですが、ここで臨時ニュースです。昨夜未明、アメリカ、日本、——》

天気予報が突然臨時ニュースに変わったようだ。ええい…天気予報は俺を嫌っているのか？！

《——にて同時刻に殺害されていることが判明されました。殺害現場には共通して暗号のようなものが書かれており、警察は調査——》

殺人事件か。いつ聴いても気分が悪くなるな。犯人は殺された側の遺族の気持ち理解できないのだろうか。

…まあ、いいや。俺には関係ない。関係ないんだ。朝食を食べ終わった俺は学校指定の制服を着替え終わると荷物片手に家を飛び出すのであった。

あ、やべえ行ってきましたって言いそびれた。家に帰ったらお母様でまってるんだろうなあ……腹をくくらねば…

ようやく今日一日の授業が終了した。ながかった。ものすごく長く感じた。だがしかし、感じただけでは意味がない。

家には釣り目になったお母様が待っていることは間違いないし、家に帰る時間を遅らせれば遅らせるほど説教タイムが長引くだけだ。高校で友達にゲーセンでもいかねえか？って誘われてとか言っても無駄だろうし…素直に帰るしかないか。

俯きながら家に帰る準備をする。本当は俺だって帰りたくないさ。

帰ったら確実に…駄目だ。言葉にできない。

「や、一輝。いつもなら鉄砲玉のように家に帰るのに今日は元気ないね。またおばさんの機嫌損ねたんでしょ？」

「ああ、なんだ。美那か…」

「なんだってなによ。一応心配してあげてるんだけど…」

俺の隣に立っている少女。それも美がつくほどの、だ。名前を葉月美那。何の縁かはわからないが幼馴染ってやつだ。

明るく活発で、とっつきやすく、その場の空気をよく読めるとてもいい奴だと思っている。個人的には。

ほかのやつがどう考えてるかは知らん。

「あー…いや、今朝行ってきましたって言い忘れて飛び出してきたんだ。今頃家ではお母様になって俺をまだかまだかと待ち続けているに違いない…」

「あはは…一輝の家のおばさんってそういうところ結構うるさいもんね…ご愁傷様」

そうなのだ。俺の母親は変なところにこだわりを持っている。ご飯を食べる前にはちゃんといただきますということ。知り合いと出会ったときはきちんと挨拶をすること、ほかにも数え切れないほどに母親こだわりのルールがあるがそれは割合させていただく。

とにかく、日常会話のあいさつに深いこだわりを持っているようで少しでもいい忘れがあるとお母様と化す。

今朝の行ってきますはその件に該当するわけで、今俺は必死に回避策を頭の中で探しているわけだ。

ん？までよ…心中お察しますという表情を浮かべる美那の顔を見ていて回避策が思いついた。

「美那。久しぶりに俺の家に遊びに来ないか？」

ずばり、久しぶりの幼馴染の来訪を利用してなんとかお母様をなだめてみよう作戦だ。

ここ4、5年ぐらいは家に誘うようなことがなかったからな。中学のあたりから女性は女性で、男性は男性で遊ぶ。つという雰囲気になされたこともあるがそれ以上に周りの目が妙に痛かった。

美那のやつと恋人だとか思われたら美那に迷惑がかかるしな。

まあ、それはともかく母さんにとっては久しぶりにあうことになるであろう美那のことできつと頭がいっぱいになるはずだ。なってもらわなければ俺の体が持たないだろう…

「え？…本当にいいの？迷惑かけたりとかしない？」

「なんで迷惑になるんだ？全然問題ないぞ」

迷惑どころか救世主様にみえるからな。利用するような形で悪いけども。

「そ、そう？じゃあ帰ったらすぐに一輝の家に行くね」

「え”？…帰ったら？」

「だって制服のままで行くのはさすがに体裁が悪いでしょ？」

「いや、別にそんなことはないと思うけどなー」

「私がそう思ってるの！とにかく帰ったらすぐにいくからね。じゃあまたあとでー」

「行ってしまった…」

サヨナラ俺の女神さま。一緒に帰らないんじゃあ意味がないというのに…

結局俺はお母様と遭遇する運命にあるというわけか。

「なんだ一輝。葉月と何話してたんだよ？」

ニヤニヤと笑いながら近づいてくる俺の親友兼女たらし。名を宮瀬知一という。

「なんでもねえよ…それよりも俺は家に帰ることが怖くて怖くて仕方がない。知一、お前俺の代わりにお母様に怒られてくれないか？」

「なんだよお前、またやつちまったのか。いやはや大変だねえ。でもってさっきの件は謹んでお断りさせてもらおう。俺も命は惜しい」

「だよなあ」

「まあ、こつてり絞られてこいよ。俺は愛しい愛しいリュボフと待ち合わせがあるからさ」

「犬との散歩に愛しいも何もないと思うんだが」

「よし、表に出ろ」

「何ゆえに?!」

「ならば俺も問う。なぜこの感情が分からないと!!お前にはリュボフのさらさらとした手触りがとてもいい毛並み、とても愛くるしいあの表情、そして何よりも俺を前にすると嬉しそうにフリフリするあの可愛らしいしつぽ!!お前にはなぜ俺のこの気持ちが理解できんだ!!」

「いや、お前の場合その言葉だけ聞いてると愛犬家にしか聞こえんがその本人の語っている表情を見ると…な」

恍惚とした表情で、しかも息切れなのか故意になのかは分かんがハアハア言ってるし。正直病的とかそんなレベル。俺だから良いものを他人が見たらドン引きするぞお前の今の表情。

「俺の愛情表現にみだらな思いはこれっぽっちもない。むしろ俺の愛情表現をみてそう思うやつがみだらなのだ!」

「はいはい。俺はもう帰らないといけなからお前も早くリュボフに会いに逝け」

「そうだった!!それじゃあな一輝。また明日ー」

「おう。また明日」

やれやれ、俺も早いとこ家に帰って絞られるとするか…トホホ

第1話（後書き）

誤字脱字、表現の違いなどがありましたらご報告下さるとうれしいです。

第2話（前書き）

今回でプロローグ編は終了です。

自分なりには表現や描写を精いっぱい書き連ねたつもりなので楽しんでもらえれば幸いです。

第2話

とうとうついてしまった。どこにつて？決まってるだろう。お母様が待っているであろう魔王^{わが家}の城にだ。

今の俺には自宅がラスボスの間に見えるのさ。

正直、帰り道に何度知一の家に押しかけようかと思ったことか。かといって美那を誘っておいて俺が家にいないのはダメだろ？

覚悟を決めて家の門を開く事にした。普段通りならば門のすぐそばにある玄関前の扉に仁王立ちしているはずだ。俺はゆっくりと門を開けていく。

そして門を開ききったその先へと眼を移した。

そこには俺が想像していた仁王立ちのお母様はおらず、しんと静まり返った物音一つしない風景があった。

これはおかしい。いつもは鈴音が何かしらのアクションを俺に行使するかお母様による制裁が待っているはずなのにだ。嫌な予感がする。

俺は生唾をぐくりと飲むと同時にゆっくりと玄関の扉を開いた。

家の中もしんと静まり返っていた。いつもはゆっくりとした音楽が流れていたり、鈴音の友達が来ていたりしてガヤガヤと騒がしかったりと静かになった事がないこの家だ。

俺は恐る恐るとリビングへと歩いて行く。一步一步ゆっくりと確実に。

今ではこの静まり返った空気が逆に不安とあせりを生んで俺に重くのしかかってくる。

そして、不意に今朝のニュースを思い出す。

——殺人事件

いやいや、まさかそんなはずはないさ。殺人事件は日本でも結構起こるけども当事者になんて俺がなるわけがない。家族の中には誰一人として恨みを買ったような真似をしたことがないはずだ。

ネガティブだった思考を無理やりポジティブにして思いこむ。

ゆっくりと歩みを進めた俺はリビングの扉前に到着した。

この扉の先にはきつといつも通りの風景が映っているはずだ。きつと今日は家族全員の体調が著しくなかっただけに違う。

俺は安心感を得たいがためにリビングの扉を開ける。

扉の先に移ったのはあか、赤、紅。

これでもかというほどのおびただしい血の跡がテレビの画面に、ソファに、テーブルに、壁に余すところなく付着していた。

絶望感が広がっていく。呆然としながらあたりを見回していくとテーブルの足元付近に人の手が映った。

アレは一体何なんだ？考えるな、考えるな、近寄って確かめるな。アレを見てはいけない。

思考とは裏腹に体は手のほうへと近づく。

近づくな。近づいちゃだめだ。認めちゃだめだ。確かめちゃだめだ。そこにあつたものは父さんの死体だった。

そして、すぐそばには母さんの死体が見える。

父さんの死体は腹部に人の腕ほどの穴が開いていて、そこから服へと血がにじみ出て床を赤く染めている。

母さんの死体は血が一か所からではなく複数の箇所からにじみ出ている、さらに一部原型をとどめていない部分もあり、もはや肉塊としか言いようがないものとなっていた。

その近辺には抵抗した時に持っていたのであろう包丁が横たわっていた。

認めてしまった瞬間に胃から来る圧迫感と嘔吐感に襲われる。そして、口に酸っぱさが広がり思いっきり吐いた。

今朝までのいつもと変わりのない風景。

そして、怖いけれども、やさしくていつもニコニコ笑っていた母さん。

「なんなんだこれは…なんなんだよ一体。何がどうしてこうなったんだ!!」

頼りない雰囲気を放っているがいざというときは頼りになる父さん。

「嘘だと言ってくれよ。頼むから、夢だと誰か言ってくれよ!!」

自分には関係ない。そんなことあるわけがない。そうずっと思っていた出来事が目の前に広がっている。これは夢でも嘘でも幻でもドッキリでもない。現実だ。

認めなくちゃならない。分かっている。でも、だからこそ認めたくない。

矛盾した気持ちが駆け巡り、一輝を思考の海へと潜らせる。

だからだろうか、後ろから近づく気配に気付けなかった。

徐々にその気配は一輝へと近づいていく。そしてついに一輝の背後にたどりついた。

「こんにちは。君が月城一輝君だね？」

一輝はその声が後方から聞こえたことに気がつく立ち上がり、後ろへと振り向く。

そこには白い軍服のようなものを身にまとった白髪紅眼の30代男性がやさしい微笑みを浮かべて立っていた。

「誰だよ……オメエは」

「私かね、ふむ。強いて言うならば導くものだ。君にお願い事があるってね」

「お願い事…？」

「そう、お願い事だよ。そのお願いごとのためにご両親にお話をつけにきたのだがね。いやはや、残念だった。実に惜しい人たちを亡くしてしまった。君のご両親ならばきっと良い友人になれると思っていたのに残念だよ」

惜しい人たちを亡くしてしまった？良い友人になれると思っていたのに？残念？

それによく見れば白い軍服の袖部分が赤く紅く染まっている。アレは一体何の色だ？

「お前が…」

「ハイ？なにかな？」

「お前が…お前が殺ったのか。お前が殺ったんだな！！」

タガが外れた。一輝は我を忘れて怒り狂い、白髪紅眼の男に殴りかかる。

「暴力はいけない。それに私は君を迎えに来ただけであってこんなことをするために来たんじゃない」

白髪紅眼の男は若干あせった表情を浮かべながら一輝の拳を避ける。

「なにが迎えに来ただ！何が暴力はいけないだ！！お前がやった事はなんだ！！人殺しだろうがっ！！そうやって今までも殺してきたんだらうオメエは！！」

「そうですね。私もそう思います。ですが私の本意ではない。現に私はこうしてあなたと」

「黙れ！！お前の話を聞く耳なんざもってねえっ！！父さんと母さんの敵iiiiiiiiっ！！」

横たわっていた包丁を手に取り、包丁を突き刺そうと一輝は突進する。勢いよく、確実に殺せるように。

白髪紅眼の男の心臓を突き刺せるようにと。

白髪紅眼の男は悲しそうに、そして残念そうな表情を浮かべると左腕を前に突き出し心臓へささらないようにと防御の姿勢に移る。

ならばその腕ごともらっていくとばかりに一輝は包丁を突き出して突進する。

そして包丁は左腕部分に接触して白い軍服を切り裂き、腕を斬りかかるというところでひびが入り、砕けて折れた。

「なっ？！」

敵をとった。完全にそう思っていた。しかし現実の違い、包丁は砕けて折れた。

その一瞬の隙が命取りになった。

白髪紅眼の男は一輝が包丁が砕けたことで驚いている隙に右肩関節に向かって指を突き刺した。

右肩関節に激痛が走り、一輝は声にならない叫び声を上げる。

「君は大切なファクターなんだ。暴れないでくれると私はうれしいな」

慈愛に満ちた表情でそっくり。指を一輝の関節から抜く。指を抜かれるとめり込んでいた部分から血が滲み、血が流れていく。指を抜かれた事によりさらに激しい痛みが一輝に襲う。痛みが激しすぎて意識が無くなりそうなほどだ。

——ピンポーン……

不意に聞こえてくるインターホンの音。

拙い。これはきつと…美那だ。インターホンの受話器を受けてここから逃げるように伝えなければ…

「おや？一輝君。君のお友達かな？だったらちようどいい。サヨナラを告げることができるね」

本当にああよかったという表情を浮かべる白髪紅眼の男。

この男が何を考えているのかが本当に分からない。だが、美那をこの家に、リビングに近付けてはいけない。

その一心でインターホンのほうへと必死に走る。

「おやおや、せっかくのあいさつなんですから直接会いましょうよ？」

そういうとともに一輝を捕まえて右足を指で貫く。それと同時に激痛が走り一輝はその場で倒れ、もう一度声にならない声を叫んだ。

美那の性格上、いや、俺が知っている昔の美那だったらインターホンを押して返事がなかったのに家の力ギが開いていたら遠慮なく入ってくる。今の性格は昔と変わらないからおそらくここに来ることは目に見えている。だからこそ、だからここに来てはいけな事を伝えたかったのにその希望が絶たれてしまった。

もう、何も出来ることはない。いや、考えるんだ。まだ何かあるはずだ。伝える方法を…俺の思いつくかぎりの方法を。

「一輝ーいるんだったら返事してよ。一輝ー！」

どうやら声が聞こえるほどに近づいてきてしまっているようだ。もう考えている時間がない。一刻も早く美那に伝えなければ…

「美那！！ここから早く逃げろ！！逃げてくれっ！！」

俺の声が届いたのだろう。足音がだんだんと速くなりかけ足になってきた。そしてだんだんとその足音は大きくなって行く。

なんでこっちに向かってくるんだ。逃げろって言ったんだぞ。頼むからこっちに来るな。来ないでくれ。

俺の願いは虚しくもかなわず、リビング入口の扉が開いてしまった。

「なんだ、一輝。ここにつて…」

そう、この一室はすさまじいほどの血で染まっている。そして、俺もまた傷だらけで出血している。どこからどう見ても惨劇の場にか見えない。そして、俺のすぐ近くで笑みを浮かべる実行犯。

「っきやあああああつっ！！」

すべてを理解したのか美那は甲高い声で叫び声をあげた。

「こんなところで叫び声をあげられても困るのですよ。レディ」

白髪紅眼の男はそういつと美那めがけて走り始めた。

「逃げろっ！逃げてくれ！！美那ああああああつ！！」

白髪紅眼の男は美那にせまり、そして無情にも美那をその右腕で貫いた。

美那は口から血を吐くと同時にその場でうつむいた。

「この袖は血で染まりすぎましたね」

白髪紅眼の男は袖を破いてそのばで脱ぎ捨てた。その袖の中にあつた腕は俺が想像していた肉のものとは違い人の腕を模した白銀色の金属でできた腕だった。

確かに覚えたぞ。その腕を

「殺して…やる。……絶対…お前を…」

意識が遠のくのを感じる。血を流しすぎたのだろう。

俺は白銀で出来た腕の男のことを脳裏に焼き付ける。絶対に忘れないようにと。

そして、しばらくしないうちに俺の意識は堕ちた。

どれだけの時間がたったのかは分からない。ぼんやりと眼を見開い

た先に見えたものはガラス張りの何か越しに見える老人の顔だった。俺が眼を開いた事に驚いたという表情をしてから必死に話しかけているように見えた。

しかし、意識がぼんやりとしている所為なのか老人が何を言っているのかは分からなかった。

そしてしばらくすると睡魔に襲われ、俺はまた意識を手放すのだった。

第2話（後書き）

誤字脱字表現方法の間違い等があればご報告願えれば幸いです。

第3話（前書き）

大学のテスト怖いよテスト…
そんな恐怖を紛らわせつつ深夜の妙なテンションで書き上げたので
ところどころ見苦しいかも知れませんが楽しんでいただければ幸いです

第3話

雲が一つも見つけられないぐらいの青い空。そして、その青い空の真上でさんと照りつけるまぶしい太陽。誰がどう見ても快晴とというのがふさわしい天気である。

そして、そんな天気に見舞われている場所は森。ただの森ならば何の問題もない天気だがそこは熱帯ともいえるような暑さを誇る地域で飲み水がなければ数週間で干からびるほどである。

そんな森の中を走り続ける者が一人、そしてそのあとを追うものが多数いた。

「しつこい。本当にしつこいわ。なんなのよあいつらは！ただほんのすこーし水と食料を頂戴しただけじゃないの。それだけの理由で必死に追いかけてくるとか信じられないわ」

ほんの少しと言ってはいるが、彼女の衣服の周りには大量の食糧袋、そしていくつもの水筒がぶら下がっていた。

他の人から見れば過剰といえるほどの量だと断言できるだろう。

そして、それほどの量を持っているのかかわらず追いつかれずに逃げられているのはひとえに彼女の運動能力が他の者に比べて格段に優れているからだということが見て取れる。

「この女待^{アマ}ちやがれっ！！とっ捕まえたら調教して売りさばいてやらあっ！！」

「誰が待つもんですかっ！そんなことされると分かればなおさらよっ！あなた達はおとなしく私が生きるための礎になって頂戴」

追いかけられる者と追いかける者達は木々や草、そして苔がところ

どころ生えたある程度形の整えられた石段や石柱で複雑に絡み合った自然と人工物で組み合わさった迷路駆け進んでいく。

追いかけるものは時折後ろへと振り向いては相手の状態を確認し、そしてまた前を向いて走り続ける。

「へへっこの調子なら逃げられるかな？」

徐々にはあるが追いかける者と追いかける者の差は広がりつつあった。

追いかける者達の表情にも疲れが見えてきている。それに比べて追いかける者はまだ少し息切れしている程度で疲れの色はみえない。それどころか少しばかりの余裕の表情が見られた。

「じゃあまたねー。お・じ・さ・ん・た・ちつてきやあつ?!」

これだけ離れば逃げ切れる。そう判断した追いかける者は後ろを振り向いて宣言したその時、追いかける者は黒い何かにぶつかって倒れこんだ。

何にぶつかったのかをいち早く確かめるために追いかける者はぶつかった方向へと目を向ける。そこにいたのは黒い見なれない生地で作られた衣服を身に纏い、左腰に見なれない剣を身に付けた青年だった。

あの日から、白銀の腕の男に父さんと母さん、そして美那を殺されてからどれだけの時間が過ぎたのかは分からねえ。気がついた時にはわけの分からぬないカプセルの中で俺は真っ裸で放置されていた。中から抜け出す方法が分からなかった俺は適当にカプセルの中で暴

れていたんだが運よくカプセルが開いて脱出することはできた。

あたりを見渡してみるとどうやら古い研究所か何かみたいで俺が眠らされていたカプセルのようなものが幾数個放置されていた。机には何かの資料だったであろう紙が散らばっていたがインクが擦り切れてしまっていて何が書いてあったのかは分からなかった。

俺は今、どの国のどの位置にいるのかを確かめるべく、外に繰り出そうとした。が重要なことに気付いた。今までずっと体が妙にスー・スーするなとは思っていたが、まさか服を着ていなかったとは……さすがに裸のまま外を練り歩くのは流石にわいせつ罪で捕まるよな。

俺はとりあえず復讐を果たすまでは警察にお世話になりたくないのですので服を探していたんだがなぜだか俺が通っていた学校指定の制服と下着まあ、ありたいに言えば学ランとパンツとシャツが丁寧にハンガーっぽいものに引っかけられていたのでそれを着込むことにした。俺のために用意していた。とか、そんなわけないよな。着こんでから気付いたが学ランのデザインがところどころ変わっていた。まああとで元通りに戻せばきっと問題はないだろう。

着る物は着たし、外に出てみようかと一歩踏み出した。が、なぜか俺の本能が何かを忘れていると感じた。

今の俺に所持物はなんてこの服以外何もないはずなのにだ。気のせいだろうと思えばさらに一歩一歩前に進んでみるが前に進むたびにその本能が強く警告した。何かを忘れていると。

この妙な感覚をぬぐいきるために俺はこの施設内を自分ができる範囲でいろいろと物色してみたところ、真っ白い刀のような西洋剣を見つけた。

この剣を見つけた時、俺はなぜだかは分からないがこいつは俺のものだと思った。

その剣を手に取り、切れ味を確かめるべく剣の刃部分を指でなぞって試してみたところ全く切れ味がない剣だった。刃物なら少しばかり皮膚が斬れるものだ。俺はなまくらだと思いその場でその剣をた

たき折ろうと近場の障害物にたたきつけた。が、こいつはなまくらなんてものじゃなかった。叩きつけた障害物がまるでやわらかいバターのようにスパツと斬り崩したのだ。

正直、呆然とするしかなかった。俺がやつあたりにと叩きつけたのは金属製のよくわからない台座のようなもので簡単に切り崩せるような代物ではなかったからだ。

切り口を見てみたところ、なめらかな一直線の面でもじやないがこれが切り崩した断面だと到底は思えなかった。

これほどの技物ならば名前もあるのだろう。そう思った俺の脳裏には一つの言葉が浮かんた。

ソードオブオウガスト

―― 8月の剣

なぜそんな言葉が浮かんできたのかさっぱりだったがきつとこの剣の名前なのだろうと俺は納得しておくことにした。

俺の記憶にない忘れ物はきつともうないはずだ。この施設内はくまなく探したつもりだしな。

俺はこの施設の出口目指して歩き始めた。

そもそも、俺はなぜこんな場所で放置されていたのだろうか？非人道的な実験を行われていたと仮定しても今現在の俺の体は絶好調なのでそれはないと思われる。

まあ、以前よりも体が軽く感じるのが妙だがきつと気のせいだろう。うん、気のせいだ。

他にもいろいろと考えていてふと思い出したが、鈴音は今どうしているのだろうか…

父さんと母さんが殺されて、俺は拉致。きつともものすごく辛く寂しい生活を送っていることだろう。

一刻も早くこの施設からでなくてはと俺は早足になった。
長く複雑に入れ込んだ道を進んでいく。そしてある程度歩いた時点で気がついた。

「ここってさつきも通ったような気がするんだが…」

念のため8月の剣で壁を薄く切りつけて印をつけ、先へと進んで視ることにした。ソードオブオウガストそしてしばらく歩き続けているとまた見なれた道にでた。念のために壁を探してみると案の定印を発見した。どうやら同じところをグルグルと回り続けていたようだ。

「この年になって迷子になったのか俺は…」

俺は深くため息を吐いて落胆した。俺ってバカだけでも方向音痴になるほどではなかったつもりだったんだが……さて、落ちこんでる場合じゃないので鬱な気分になるのはここまでにしてと、問題はどいうやってこの施設から脱出するかだな。かといってまともに進んでも出口にたどりつく自信は今の俺にはミジンコの体組織ほどにもなかった。

ある程度どうするか考えるが解決策は見つからない。

「あああああああつ！！面倒だ。壁を切って前に進んでりやそのうち外に出られるだろっ！！」

やけになった俺は壁を切り崩しては前へ前へと進んでいくことにした。

最初からこうしてればよかったな。うん。

何度も壁を切り崩して直進しつづけ、俺はようやくと施設の外へと出ることに成功した。久しぶりに吸った外の空気が妙においしく感じた。

あの施設内が妙にほこりっぽくてジメジメしていたのが原因だろうと俺は思ったんだがそれはすぐに勘違いだと気がついた。

施設の外はジャングルで囲まれていたからだ。どうやら俺は相当ヤバイとこにいるらしい。試しに施設周りをぐるりと一周してみたが人が手を加えた道のようなものはみえず、あるのは少し分かり辛いくけもの道だけだ。

ただここにいてじっとしていても、誰かが来るわけではないのでとりあえずジャングルをまっすぐ進んでればいつか町なり集落なり見つかるだろうという軽い気持ちで奥へ奥へと進んでいくことにした。まっすぐにまっすぐにと考えて進んでからはや数時間が経過した。太陽の光は真上に出ていて虫暑苦しいジャングルの気候をさらに暑くするべく照らし続けていた。

そのころには俺は腹が減って腹が減って、本当にどうしようもないほどに腹が減っていた。

なにか食べれるものが自生していないかとあたりを見渡すが全くそれらしいものは見られない。むしろ全部が毒物に見えてとてもじゃないが食べたいという気持ちが湧かなかった。

そういえば俺ってどれだけの時間飲み食いしてなかったのだろうか？ いや、止そう。食べ物関連のことを考えてたらさらに腹が減って虚しくなるだけだ。

俺は方を落とし、猫背になって前へと進んだ。しばらく無我夢中で進むとかなり早く進む何かとぶつかって倒れこんだ。

なんてスピードで突っ込んできやがるんだ。文句の一つでも言ってもやらないと気がすまねえ。

「いててて……ちょっとなによ！！前ぐらいちゃんと見て進みなさいよねっ！」

「うるせえっ！それはこっちのセリフだ！！なんて早さでつつこんで……きやがる？」

相手を見て俺は自分の目を疑った。俺にもとうとう知一のように動物に対しての変態じみた欲みたいなのが具現化してしまったのかと。

「な、なによ…私の顔に何かついてる？」

きつと俺は幻覚を見ているに違いない。念のために眼をこすって視界を正常に戻すように試みたがどうやら幻覚ではないらしい。頭の上で時たまにぴよぴよこ動く耳。そしてそいつの背中の中のようによるによろと動く長い尻尾が俺の幻覚ではなく現実で映っていた。

「そ、その耳と尻尾は本物なのか？」

「当たり前でしょ！！本物じゃなかったらなんだってのよ！！」

現実映っていることがまだどうしても本物に見えなくて俺は相手の両耳を触ってみた。暖かくてとてもさわり心地がよくとてもじゃないが作り物ではないことがよくわかる。

「い、いつまで人の耳を触ってるのよこの変態っ！！」

「わ、悪い。どう見ても本物には見えなかったんで」

「私の耳が偽物だつて言うのっ！」

「いや、そんなことはなかったぞ?!とてもさわり心地のいい可愛い耳でしたっ!!」

「にやっ?!そ、そんなこと言っただけ、ゆるしてなんか…」

耳をほめて照れるってヤツはじめてみたな…いや、論点がかなりずれたな。

とにかく、あんな速度で突っ込んできた理由でも聞いてみますか。

「それで？なんであんな早さで走ってたんだ？」

「そうだった。早くここから逃げないと…あんたも早く！」

猫少女が急いで荷物の袋と何かの筒を拾い集めようと行動に移る。なんで逃げないといけないのか分かんが、とにかく逃げないといけないということだけは伝わった。

「わかった。んじゃ俺は先に逃げさせてもらっわ」

「ちょっと待ちなさいよ！！」

「ああ？逃げろって言ったり待ってて言ったり俺にどうして欲しいんだお前は」

「私のようないたいけな少女を置いて行くなんてどいう量見よっ！」

「いや、そんな大量の荷物引っ提げて普通に立ち上がった奴にいたいけな少女とか言われても…」

普通、4、5人がかりで背負えると思われる量を軽いバーベルを持つかのようにテキパキ動く奴に言われてもいたいけな少女って感じにはみえないよな。むしろ怪力系少女だよな。

「早くこっちに来て！あいつらが追ってきてるから」

「あいつら？例えばどんな奴だ」

「ワニ男と蛇男と鳥男。あと、河馬みたいなみたいなやつだったわ」

「それってあいつらのことか？」

そう言っただけ俺は猫少女の後方を指さす。猫少女はまるでグリスの切れたぜんまいのようにガタガタと震えながら後ろを振り向く。振り向いて確認しきつた途端に急いで俺の後ろのほうへと隠れた。

それにしても本当にいるもんだな。ワニ男と蛇男と鳥男と河馬男だったっけか？ワニ男はそのまんま顔がワニで皮膚がワニ特有の青さをもっていた。いや、正直、ワニ男っていうよりリザードマンって感じだな。

蛇男のほうは人と蛇が混合したような何とも言えない顔に鱗の付いた皮膚をしていた。鳥男は…まんま鳥の顔で体毛がものすごくもさもさしている。すごくさわり心地がよさそうだ。河馬男はまんま河馬みたいな顔で皮膚にはこれといった特徴はなかった。強いて言うならば黒人っぽい色をしているぐらいだ。そして全員の共通点が全員二足歩行で人のような体型をしていたことだ。尻のあたりから尻尾が生えていたが。

それにしても、全員人相が悪そうだなあ。

「ようやく追いついたぞこの女^{アマ}！！覚悟するんだな」

「俺たちの食糧と水を持っていたことは万死に値する」

なん…だと？

食糧と水だ？

「さて、悪いがその男。その娘をこちらに渡してもらおうか」

猫少女のほうへと振り向くと瞳には涙がたまっており少しばかり表情が青ざめていた。ああ、なるほどね。

「お前、食糧盗ったのか」

「そ、そうよ…」

「人のモン盗るのは悪いことだな。それはわかってんのか？」

「分かってるけど…分かってるけどもこうでもしなくちゃ…」

「ふーん」

俺にとっちゃどうでもいいことだが、まあ困ってる人を見捨てるつても後味悪いし仕方がねえな。

「あー…腹減ったなあ…」

「いきなり何言ってるんのよあんた？」

「俺はいま腹が減って腹が減って仕方がなくなてな。誰か飯おごってくれるやついねえかなあ…」

「……！っわかったわよ。後でちゃんと食べさせてあげる！！」

「商談成立だな」

俺は腰にぶら下げた8月の剣を手に持って構える。飯GETのつい

ソードオブオウガスト

でにこいつらには俺のレベルUPに付き合ってもらおうとするか。あいつを…白銀の腕の男を殺そうにも今の俺には無理だろう。あいつはかなり強かったからな。

「おめえ…」

「悪いな。俺の進む道のための糧になってくれ」

その言葉と同時に戦闘は開始された。

第3話（後書き）

誤字脱字表現方法の誤り、感想等ございましたらよろしく願います

第4話

不思議な男だった。見た目は猿人にちかいかどもどこか違うし、衣服も私たちが来ているような毛皮や絹のような物じゃなかったし腰には鞘のないむき出しの剣を無造作にくくりつけていたし、危なくはないのかしらあれ。

私の顔と体を見て驚いてたけどもそれほど不思議なことなのかしら？そ、それには、…はじめて可愛いなんて言葉言ってもらっちゃったし…

食糧と水を盗んだことを知った時のあいつの顔は落胆と憐れみが含まれた軽蔑の表情だった。このときはきつとコイツも結局あいつらと同じ男で、私は突き出されてしまうものだと思った。

正直、怖かった。いつもいつもギリギリだけでも上手くいつていたから失敗した後のことなんて考えたことはなかった。

あいつらは私を追いかけていた時、調教して売りさばくと言っていた。私はきつとここで終わりで、あいつらの慰みものになった後、奴隷にされるんだと思った。そう思うとだんだんと恐怖が私の意思を飲みこんでいって、自然と目じりから涙があふれてた。怖かった。とても怖かった。

でも、今あいつは私を助けようと戦ってくれている。

それにしても切り始めが腹減ったはないわよね。ほんと、不器用で、ひねくれていて、そしてとても素直なやつ。それが私の中のあいつの評価だった。

「へっ俺たちに逆らったこと、後で後悔してもしらねえからなああああっ！」

「ふん。生憎俺は後悔しきった後なんだな。もう後悔するようなもんは何もねえんだよ！」

以前の俺なら戸惑ったはずの戦闘。相手が持つ凶器を見ても震えもしねえし恐ろしいとも感じない。

俺が倒れた後で何か俺の体に施されたのか、あるいは恐怖感が麻痺しているだけなのか。いや、今はどっちでもいい。今この時を俺が生きていくためには不必要だ。俺は楽観的な考えをまとめつつバスターソードを手に持って突進してくるワ二男の一撃を避ける。避けた場所には狙っていたかのように弓矢が飛んでくる。俺はそれをとっさに8月の剣で斬り伏せた。まさか俺がここまで動けるとは思ってもいなかった。これだけ動けるのならあるいは白銀の腕の男も倒せるかもしれない。

「隙アリだ！黒猿野郎！」

「もらったあああああつ！」

そんな考え事していると左右から蛇男と河馬男が長剣で切りかかってくる。

「うおっ？！当たったらあぶねえだろうが！」

俺は後方へと素早く移動すると素早く蛇男を蹴り飛ばし、河馬男は持っていた剣の刃を根元から切り飛ばした。河馬男は蹴り飛ばされた先にあつた岩にぶつかり気絶する。

「ならさっさと降参しやがれっ！」

ワニ男はバスターソードを上段から振り落としつつ突っ込む。

「食いつぶれるのは嫌だから無理な相談だ」

それを一輝は8月の剣で受け止めた。
ソードオブオウガスト

「でたらめな野郎だなお前はっ！俺たち4人相手に同等以上に戦いやがるんだからよおっ！」

「そいつはどうも」

ワニ男のバスターソードと一輝の8月の剣はお互いがお互いを押し付けあい、ガチガチと音を鳴らす。どちらの剣も未だ折れることなくワニ男と一輝が剣と剣を交差した状態を維持し続ける。

それを好機とみた鳥男は再び矢に手をかけ、射る。それは吸い込まれるかのように一輝の左背中、心の臓のある場所へ直撃した。

「ざまあ見やがれ。カッコつけるからこういうことになるんだよ。ヒヤッハー」

次の瞬間に奴は倒れる。鳥男、そしてワニ男と蛇男もそう思っていた。

しかし、現実は違った。

一輝は心臓を射った鳥男のほうへギリと睨みつけると交差し続けていたバスターソードを打ち上げ、そのままワニ男の首を断ち切った。

頭は明後日のほうへ飛び、胴体はその場で倒れ伏せ、首の上から無くなった部分から血が流れ出ていく。

鳥男と蛇男は背筋に寒気を感じた。それは二人とも今まで感じてきたことはあった。しかし、今回は一段と強烈なものだった。

ふと一輝のほうへと視線を向ける。そこにはうつむきながらも口元を動かす一輝がいた。

—— ツギハオマエノバンダ

鳥男は一輝がそう言っているような気がしてならなくなった。恐怖に怯えた鳥男は腰を抜かしながらもその場から一刻も早く立ち去らんとあわてて走り出した。それを見た蛇男はのびている河馬男を背負って逃げ去るのだった。

今回のこの戦闘は大きな収穫だと俺はワニ男達と剣を交えていて思った。動けはしたが経験がない以上苦戦するだろう。そう思っていたのに戦闘経験者と同等以上に戦える。これはうれしい誤算だ。そう考えながら戦っていたのがいけなかったのだろう。

俺の左背中矢が突き刺さった。ウソだろ？　ようやく、ようやく奴を…白銀の腕の男を追いかける事が出来るって言うのに…もう俺の人生終わりなのかよ…

そう悲観していたが痛みはいつまでたってもやってこない。

もしかして、何ともない？　そう思うとだんだんと腹が立ってきた。射って着たであろう場所へと睨みつける。しかし、その方向には人影を感じられない。畜生め。苛立たせやがってええええっ！

俺は八つ当たり気味にワニ男のバスターソードを打ち上げ、その勢いを利用してそのまま首を切り落とした。気持ちの悪い肉の感触が剣を通してこの手に伝わってきた。

俺は今、初めて生き物を殺した。しかし、俺がやらなければ猫耳少女が危なかった。俺が殺らなければ助からなかった人がいて、それを助けられたんだ。それでよかった事にしよう。

そして、殺した相手のことを覚えておこう。せめてもの罪滅ぼしに……いや、やめておこう。俺は復讐者。過去にこだわっても後ろを見ずに前に進むだけだ。
それでもやっぱり…

「この手の感触はなれたくはないもんだな」

俺の心からの感想が口からこぼれ出た。

「さっきはありがと、助かったわ」

「ああ、そりゃよかったな」

「それにしてもあんたって強いよね。そんな黒尽くしのあやしい格好してるのに…」

「ほめてんのか…それとも遠まわしにけなしてんのかお前は…」

「ごめん。私はそんなつもりはなかったんだけど気に障ったのなら謝るわ」

にやはははと笑いながら猫娘が俺に話しかけてくる。こいつの姿を見てると、なんだか活発で好奇心旺盛な子猫にものすごく懐かれたような、そんな感じがするな。

いや、表現としては間違っちゃいない…のか？

それにこいつ見てるとなんだか少し癒されるような気もするな。

「ねえ？人の話ちゃんと聞いてた？」

「あ、わりい。聞いてなかったな」

「仕方がないわね、もう一度だけ言うわよ。今ここで食糧を分けてあげるにしてもあんた、食糧入れるような道具持ってなさそうだし私が住んでる集落に着いたら食糧入れる物分けてあげるからそれに詰め込んでほしいっていったの」

「あ、ああ。そうだったのか。悪いなそんなところまで」

「べ、別にあんたに気があるとか…そういうのじゃないんだからね！これは命の恩人であるあんたへのお礼なんだから！」

「ハイハイ。了解しましたよっと」

前言撤回だ。癒されもするが、それ以上にこいつと話すのは疲れるわ。無駄な言い回しが何とも面倒くさい。まあ、なんだかんだいつてこいつの世話焼きっぽい性格は嫌じゃないけどな。

「それにしてもあんた。さっきからずっとだらけた表情してるんだけども、さっきの戦闘中みたいにもっとピシッと決められないの？」

「いつでもどこでも張りつめたまんまでいられるかってんだ。俺を過労にするつもりかお前は」

「過労ってあんたね……もういいわ…何言っても聞かなさそうな気がするし…」

「そうしてくれ。そのほうが俺もいろいろと気が楽だ」

「あ！そういえば……」

「今度はなんだ猫娘」

「そう、それよー!」

「はあ？」

「私は猫娘なんて名前じゃないの！私の名前はクリスカ。クリスカ・グッドマンよ。あんたは？」

「俺の名前か？俺の名前は……一輝。ただの一輝だ」

「ただの・かずき？変な名前ね」

「典型的な間違いしてんじゃねえぞこの栗饅がっ!」

「クリマン？それって私のこと？」

「そうだよこの栗饅が」

「ふうーん。愛称みたいなのもよね。じゃあそれでいいわ。ところで典型的な間違いって？」

やべえ…相手の勘違いで結構不名誉なあだ名つけちゃったかもしれねえぞ俺…悪口で行ったつもりがまさかそうとらえられるとは思わなかった…結構罪悪感がくるんだが…

「あ？ああ、名前間違えるなって事だ。俺の名前は一輝だ」

「かずき…カズキ…一輝。よし、覚えた。ところでファミリーネームは？」

「捨てちまったよ。」

それが、不器用な俺なりの復讐するための決意。そしてけじめのつけ方だった。

「ところで一輝ー」

「んあ？なんだ栗饅」

「ずっと気になってたんだけど矢が背中に突き刺さってるのって痛くないの？」

「……う”えええええええつ？！」

最後の最後でしまらない一輝だった。

第4話（後書き）

誤字脱字表現方法の違い、感想等ありましたらよろしく願います。

第5話（前書き）

これだけは譲れない！っというところを表現してみたつもりですが
シキレテナイカモ…

あと、テスト怖いよ特に物理…ゲフンゲフン。
どうしてもよかったですね。

それでは第5話をお楽しみください

第5話

一体いつまで歩くんだよ。かれこれあれからけっこうな時間がたつてるんだが…そろそろ俺の腹の具合から見て限界こえそうなんだが…かといって食えるもんねえし…

「なあ、まだお前の言う集落にはつかねえのか？」

「あともうほんの少しでつくわ」

後もうほんの少しって…あたりにそれらしいのが俺には全く見えないわけなんだが…あれからジャングルは何とか抜け出したが、その次に見えたのはコンクリートで整えられた道などではなく、草や花があたり一面に広がってやがった。まあ、要するに草原ってやつだな。そこをかれこれ1時間ほどは歩き続けているわけだが、俺の腹減はそろそろ俺は限界を迎えるだろう。というか迎えます。

「腹…減った…」

「ちよつと？一輝！一輝？！」

俺はその場でぐったりと倒れた。

俺が腹減りで倒れてからどれだけの時間がたったのかはわからない。未だに少し眠気があるがそれを我慢して眼を見開く。俺が見上げた

先には木造の天井とそれを支える柱の一部が眼に入った。

「まったく見覚えのない光景だ」

上半身を起き上がらせて現在の自分の状況を確認する。

服は…問題ない。改造学ランのままだ。ベルトには8月の剣が差さソードオブオウガストったままだな。持ち物は問題ない。

「あ、漸く起きたのね一輝」

とりあえず行動するかと思ったと同時に扉の向こうからクリスカ・グッドマン。もと栗饅が現れた。何ともまあ都合のいいことで。まあ、そっちのほうがどう行動するかとか考えずに済むから良いか。

「ちょうどいいタイミングだ栗饅。ここは一体どこなんだ？で、あと食えるもんをくれ」

「漸く起きたら催促することがそれなの？ここまで私があんたを引っ張ってきてあげたんだから感謝してほしいんだけど…」

「あー…そうだったのか。ありがとう。で、ここは何処？あと飯は何処いずこへ行けば食えるのでしょうか？」

「はあ……なんでこいつに助けられたのかしら私は…」

呆れ顔になったクリスカは頭を抱えてベッドに居座る一輝をにらんだ。

その後、すぐに自分に言い聞かせるようにブツブツと独り言を言い始める。その独り言はしばらく続いたが、独り言が終わると同時に一輝に向き合った。

「えーっと、ここはどこでご飯はどうすればいいのかだったわね。ここは倒れる前に話していた集落の私の家で、ご飯はくすねてきた食糧の中に調味料がなかったから味が薄くなるか単調になるかなんだけでも、それでよければ今作ってる奴があるからそれをごちそうするわ。」

「そっか、おまえ料理で来たんだな。とてもものすごくかなり意外だ」

「別に食べたくないのならそれで良いんだけども？」

「すいませんでした！」

飯が食えなくなると分かった途端に一輝は土下座を戸惑いなく無駄に素早い動作で行った。

「わかったのならよろしい」

なんかむかつく。むかつくがここは飯のためだ。飯のために我慢しよう。飯のことさえなければ言い返すんだが……っく。なんだかこいつ見てたら鈴音を思い出してきたな………鈴音？！

そうだよ。なんで気がつかなかったんだ。父さんと母さんが殺されたのは見たから分かるが鈴音がどうなったのかは俺には分からねえ。くそ……なんで早く気がつかなかったんだ俺は。気が動転していたからって確かめに行かなかったただなんて俺は兄失格だ。無事でいてくれ……鈴音。

俺は思考を止めて前を向くとそこには心配そうな顔をして俺を覗きこんでくる栗饅がいた。

「ね、ねえ？大丈夫？急に体が震えて歯ぎしりしてたけども病氣じゃないよね？」

「あ、ああ…ちょっと腹減りすぎて体調が悪くなったただだから心配は…」

「体調崩れるほどにお腹すいてたの？！もうそろそろ出来上がるころだから私は調理場にいくね！食べる場所はこの部屋で右のほうに行けばわかるから！」

クリス力は勢いよく扉を開けるとあわてて調理場へと走って行った。栗饅…いや、クリス力に余計な心配させちまったな。後でもう一回詫び入れなくちゃいけねえなこれは…今はとにかく鈴音の事は置いといて俺の今いる場所、そして白銀の腕奴の男の情報を手に入れることが最優先だ。

「一輝！ご飯できたよ！」

つと、お呼びのようだ。今いる場所と奴白銀の腕の男の情報も最優先だが俺の腹減りをどうにかするのがさらに上だ。倒れちまったらそれどころじゃなくなるからな。

俺はベッドから立ち上がると扉のほうへ向かって歩きだした。扉を開けて前を見ると左右に道が別れていた。

「えーっと…たしか右だったよな？」

俺は脚を少しふらつかせながら右のほうへと進んでいく。道なりに進んでいくとリビングだと思われる場所への扉を見つけた。俺は戸惑い無くその扉を開けるとその先にはパンとシチュー、そして牛乳らしきものがテーブルに並ばれていた。

「あ、来たわね。席について一緒に食べよ？」

言われると同時に俺は席に着いた。味はどうだかわからないがとても美味そうに見える。

「いただきます」

手を合わせてそういつと俺はすぐにシチューとパンを食べ始めた。久しぶりに食べる飯はやっぱりものすごくうまい。…ん？なんで久しぶりなんて思ったんだ俺は…まあいいか。とにかく今はガッツリ食べておこう。

「す…すごい食べっぷり…よっぽどお腹すいてたのねアンタ…」

勢いよくパンとシチューを食べていく一輝をみたクリスカは驚きと呆れが混ざった表情を浮かべていた。

「ああ、それにしてもおまえものすごく料理うまいのな。さっきは悪かった」

「べ、別にアンタに褒められたって嬉しくなんかないわよ…」

どうやら栗饅は褒められ慣れてないらしい。まったく、うれしいならうれしいで素直にそう言えばいいのに…顔赤くしてニヤけた顔して言われても説得力皆無だぞ。

「と、ところで一輝。アンタが食べ始める前に言ってた言葉。たしか“いただきます”だったっけ？それってどういう意味があるの？」

「えーつと俺の記憶が正しけりやだが確か食べ物として狩られた生き物に対しての感謝の意味だったっけか？そんな感じだったはずだ」

「意外と意味深ね…そんな短い言葉にそんな意味を持たせるだなんて」

「そんなに深いかね？あ、栗饅。シチューおかわり」

「その調理場にお鍋があるからそこから勝手にすくってきてー」

「よし、ならば大盛りだ」

「あー…食った食った。ごちそうさま。俺もここまで食うとは思わなかった。」

「そうね…あれからさらに大盛りで3杯もおかわりするとは私も思わなかったわ……」

「おまえの料理がうますぎるのが悪い。きつと嫁に行ったときは相手を幸せ太りさせるに違いない」

「け、結婚なんてまだまだ先の話よ！でもって私は結婚相手を太らせなんかしないように徹底的に健康管理するから問題ないもの！」

無理だろうと俺は思う。なぜならこいつの性格なんとなくつかめてきたんだが好きな奴ができたらいいつきつとあんだのためなら仕方

がなくとか言って結局甘やかしそうだと思ったからだ。きっと間違いないだろう。

「そーですかい。そうなのといいな」

「なによ…その含みのある言い方。言いたいことがあるのならはっきりとしなさいよ！」

「いや、別に。ところで聞きたいことがあるんだが…」

「うぐう……はぐらかされた。…聞きたいことって？」

俺の表情が真剣なものへと変化する。その変化に気がついたのか栗饅はしぶしぶ話題の変更に乗ってくれた。

「……白銀の腕の男を知っているか？」

「あんた、正気？この付近一帯を縄張りになっている強盗集団の頭に何の用を持つてるっていうの？」

「強盗集団ね…」

「物を奪うときもあれば人攫いもするし、時には殺人もするような輩よ？」

俺の親を殺してさらには俺を重要なファクターといって拉致したあいつがそこに…

「俺は運がいいらしい…初めてあつた奴に飯おごってもらった上に奴の身の上がわかるなんてな…くっくく…あつはつはつはつはつ

は」

可笑しくて可笑しくてついつい俺の顔に笑みが浮かんでしまう。

「クリスカ！奴はどこにいる！教える！！」

俺はいきり立ってクリスカに答えを求めた。クリスカの表情は俺に怯えているのか少し震え目じりに涙を浮かべていたがそんなことは問題じゃない。問題なのは奴の居場所がどこにあるかだ。
白銀の腕の男

「し、知らないわよ！だいたい奴らはこの集落を襲いには来る！でもそれを討伐しに行こうとしない腰ぬけばかりなのよ！ここの大人たちは！！私だってそう。死にたくないのよ！強いアナタにこの気持ちは分らないわ！」

「ちっ…そうかい。でも一つだけ言っというてやる。そうやって死にたくないだの腰ぬけだの言ってグダグダしてても前には進めねえぞあの4人組相手に必死だったおまえのがまだ何倍もマシだ。ジャマしたな、俺は行かせてもらう。オマエは家の中で縮こまってる」

俺は目に見えた玄関口へと向かい足を進める。そして、扉を開けようと手を伸ばした瞬間。扉は勢いよく開かれ、知らない猫耳の男が現れた。俺は驚いてその場で尻もちをつく。

俺の知らない猫耳男は息絶え絶えになりながらも必死に言葉を伝えようと怒鳴った

「大変だっ！奴らが…奴らがこの集落につ！！」

「なんですって?!」

クリス力はその言葉を聞いて驚愕する。
そして俺はその言葉を聞いた瞬間、好機が来たとニヤリと口元を歪めた。

第5話（後書き）

誤字脱字表現方法の差異感想等ございましたらよろしく願います。

第6話（前書き）

今日のはりきって地味に更新

何がどうしてこうなった…

またまた深夜の勢いと変なテンションで書き上げたんだ。私。
怖い物理のテスト？捨てました。

第6話

陽の光が水平線の向こうへと落ち、空には月が登る。その月の光は闇夜をやさしく照らし出す。その光が照らす地の先の一つに紅く染まった地域があった。そこには馬にまたがった獣人達の集団がいくつもの松明を持って辺りを照らし、一つの集落の前で立ち止まっていた。

「さあ、やってきてやったぜ我ら銀の団さまがよう。前に要求した通りおとなしく食糧と女を差し出せばよし、さもなければ老若男女関係なしに皆殺しにさせてもらうじゃないの。なあ、兄弟?!」

「「「「「イエエエエエアアアアアッ!!!!」」」」」

イノシシのような顔をした大男が叫ぶと周りにいる獣人達はそれに答えるように大声でそれに答える。

「10分だ!10分くれてやるっ!それまでに答えを考えておくことだな!まあ、俺たちとしてはどっちでもいいことだがなあ。なあ?兄弟?!」

「「「「「イエエエエエアアアアアッ!!!!」」」」」

響き渡る声は集落に住む人々にとって悪魔の叫び声にしか聞こえなかった。集落に住む人々はその声に対して怯え、家の中で震える者もいれば何をしても無駄だと絶望するもの、そして何をどうすればいいのかと恐怖でパニックに陥ったものもいる。そんななかでも何とかまともに思考できる者も何人かおり、その者たちは集落の族長の家にてこの要求にどうするべきかを考えていた。

「この条件を呑むべきではないということはわかる。だがしかし…
我らには戦うすべがないということも確かなことだ」

「ならば、抵抗もせずに要求を呑めというのか?! それこそやってはならない事だぞ?!」

「ならば、お前があのだ盗賊団相手に戦いに出向くのか?」

「そ…それは…だがしかし! 皆で力を合わせれば…」

「集落の様を見たのであろう? 皆使いものにならんほどに恐怖で混乱しとるわい」

猫耳を生やした男性が何とかしようと口論するが、猫耳を生やした女性と猫耳の白く長いひげをたくわえた老人男性がそれを否定し続ける。

「ならば、我らの部族はどうすればいいのでしょうか!! 族長!」

「流れに身を任せ、その流れに呑まれたのならばそれまでの部族だったということじゃろう……」

「ふん。お偉いさんが募って話し合ってるって聞いたから来てみたがオマエらもクリスカ同様の腰ぬけてわけか。猫耳集団は度胸のないことで」

そこに、黒い改造学ランを着込みみ腰のベルト部分に8月の剣を携^{ソードオブオウガスト}えた青年。一輝が喧嘩腰で話し合いに割り込んだ。一輝はこの猫耳

集団のやる気のなさに失望を感じていた。

「お前は…たしかクリスカが連れ込んできたという猿人だな。これは我々猫人の問題。貴様にどうこう言われる覚えはない！」

「だったらなんで答えをまとめねえ？さっきから聞いてりや戦うすべがないだの、混乱してて使いものにならないだの。最初っからなんにもやらねえで諦めやがって…オメエらの事じゃねえのか？ああ？！」

「我らの事だからこそ、こうして話し合っているのだ！」

「話し合いねえ…んじゃ、ずっとそこで話し合ってる。俺は行かせてもらっぜ。奴らのところにな」

「まて！貴様、銀の団がいる場へ向かって何をするつもりだ！！」

「なにもする気のねえ奴らに話すことはなにもねえ。じゃあな」

一輝は扉を奴あたりのごとく勢い良く開けると怒りの表情を浮かべつつ家の外へと出て行った。その後ろ姿を見た青年はうつむくと自分の拳を握る。

「何もする気のない…か…」

一輝の言葉が青年の心に酷く響いた。

奴ら、銀の団が現れたという報告が届いてからどれだけの時間がたったかは分からない。クリス力はやけに寂しく感じるリビングで一人、椅子に座ってただぼーっとしていた。

テーブルにはやけになった時にでも注いだのであろう黄色い飲み物が氷の入ったコップに注がれていた。

これから何をするべきなのかわからない。ただただ絶望感がクリスカの思考を包み込んでいった。

「私はまだ子供で、力もなくて…何もできない役立たずなのよ…私にどうしろって言うのよ…」

自嘲気味に誰にも聞こえない独り言をつぶやく。

その瞳には輝きはなく、恐怖と絶望で暗くなっていた。

テーブルに置かれた飲み物をクリス力は手にとって飲みはじめた。今思えば、もっと小さい時からそうだった。何か怖い事が起こるたびにあきらめて、その時の流れに身を任せて、なにも抵抗することなく生きてきた。でも、抵抗してさらに痛い目を見るだけなら、諦めたほうがまだいい。そうやって今まで生きてきた。でも、お腹がすいて…すいて…死にたくなかったからあの時はたびたび食糧を盗みに行ってた。本当によくあんなことができたわねと今はしみじみ思うわ。

「一輝…私、どうすればいいのかな…」

コップを手放し、テーブルの上に置く。コップの中の氷が少し解け、カランという音を立てて黄色い飲み物に波をたてた。

「そろそろ１０分立つな。さて、兄弟！これから向こうの返事を聞こうじゃないかっ！」

おそらく相手側の返答はないということに当たりは付けているが、あえて問い。集落へと乗り込んで虐殺し、女を見つけては連れ帰り犯す。それがこのイノシシの男の楽しみの一つであった。

「た、隊長！」

「ここでは兄貴と言っているだろうが！！っで、どうしたんだ兄弟」

「へ、へい兄貴。何やら黒い衣を着た何者かがこちらに向かってきています」

「んなにい？ふむ、頭に良い報告ができるといいなあ」

確かに前方を見ると黒い何かをはおった誰かがこちらへ向かって歩いてきていることが分かる。しかし、その誰かが答えを運んできたのだとするとイノシシの男にとっては正直、悪い話でしかなかった。それでは自分が好きなように集落で暴れまわる事が出来ない。

ストレスの発散ができなさそうだと半ば諦めの表情を浮かべたイノシシの男は黒い衣の誰かが一歩ずつ近づいてくるのを待ちわびた。少しずつ近づいてくるにつれて分かるその相手の輪郭。どうやら猿人のようだ。どんな答えが帰ってくるのだろうかといノシシ男は半分楽しみにしつつ相手に問いを聞く。

「お前があ集落の代表ってことでもいいのかい？まあ、俺たちにと

「つちゃどうでもいいことだが…さて、返答を聞かせてもらおうか？」

「白銀の腕の男はどうした？」

「ああっ？お頭の事言ってるのか？だったら残念だったがここにはいねえぞ？」

「ああ、そうかい。良いことを聞かせてもらった。ありがとよイノ豚野郎！」

その言葉と同時にイノシシ男の首から下の感覚がおかしなことに気がついた。上を見上げたはずはないのになぜか上を向いている。その上なぜか浮遊感を感じる。だんだんと視界が下のほうへと下がっていき、やがて自分の首から上のない体が自分の目に映った。

俺、死んだ？そこから思考が進むことはなく、イノシシ男の意識は無くなった。

「あ、兄貴が、兄貴が殺られちゃったああああああっ?!」

「兄貴の…兄貴の敵を討てえええええっ！奴はたったの一人だ！俺たちが束になりやどっつてことはねえぞ!!」

「『『『うおおおおおおおっ!!!』』』」

獣人達の雄たけびが響きわたる。そして獣人たちは一輝にむけて殺意をとばし、一輝めがけて突っ込み始めた。

「へっ、頭を落とせばバラけ散ると思ってたが一筋縄じゃいかねえか。いいぜ、お前らのやり方は気にいらねえがこの喧嘩、俺が買った！！」

一輝は8月の剣を構え直すと自ら獣人たちの大きなうねりに飛び込んだ。
ソードオブオウガスト

もう10分はすぎた。そのはずなのに集落にはまだ被害は出ておらず、族長の家で話し合っていた者たちは不思議に思っていた。

「もう、とつくのとうに10分は過ぎたはず…なのに未だにこの集落は襲われていない。一体どうして…」

「ふむ…何か不吉な前触れでなければいいが…」

猫耳女性と老人は不思議がっていた。今頃、この集落が火の海に包まれていてもおかしくないのに、と。

「あいつだ…あの猿人が奴らと戦っているんだ！！」

「いくらあのものが強くても相手は500人はいるのだぞ？バカな事は言うものでは…」

「だったら今の状況をどう説明しろって言うんだよ。くそ、カッコイイじゃねえかアイツ。それに比べて…今の俺は何をやってるんだ

よ畜生……」

「……だったら、俺たちも今からやってみないか？ 今までの俺たちにサヨナラするつもりでさ」

扉のあるほうから今まで聞かなかった声が聞こえたことに驚き、猫耳の青年はそちらのほうへと顔を向ける。そこにはさっきまで恐怖や絶望感に打ちひしがれていたはずの仲間達がそこにたっていた。

「俺たちもさっきまでもうおしまいだっと思ってたんだけど……未だに襲われていない事にどうしてなのか？ って考え始めて……それで今俺たちが襲われてないのはあの猿人が奴らと戦っているおかげって戦闘を目撃した奴に聞いてさ……」

「よそ者のアイツが一人で気張ってるのに俺たちがなんにもしないつてのは流石に俺たちもカッコ悪く思えて、いてもいられなくなっただんだ」

「だから、今までのどうしようもない俺たちにサヨナラしたくつてさ、それにがむしゃらにでも頑張つてれば何もしないよりはマシかなって」

「お、お前ら……」

「今、他のやつらにも良い回つてるところなんだ、武器は……まあ、農作業に使う桑や鎌でもなんとかなるだろう？ 遠距離なら狩りで使う弓を使えば何とかなるだろうし」

「族長……」

それを聞いた猫耳の青年は判断を仰ぐように族長に尋ねる。

「おじいちゃん…」

「長様！！」

それにつられるように他の者も族長の判断を尋ねる。

「ふむ…皆の心が一つになったのが感じられるのう…それが外からやってきた者にとって初めてなされるのが少し癢じやが…よろしい。これは元々わしら猫人の問題じゃ。皆でうって出ようではないか！」

それを聞いた周りの猫人は勢いを増し、どのようにして向かうべきかを話し合う。

「希望が、光が満ち溢れて見えてきたのう…」

族長は希望に満ち溢れた猫人達をみて一人つぶやくのであった。

第6話（後書き）

誤字脱字表現の差異、感想などありましたらよろしくお願いします

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6304m/>

答えはまだ見えない

2010年11月3日13時46分発行